

令和4年度

劇場・音楽堂等機能強化推進事業

(劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業)

自己点検報告書

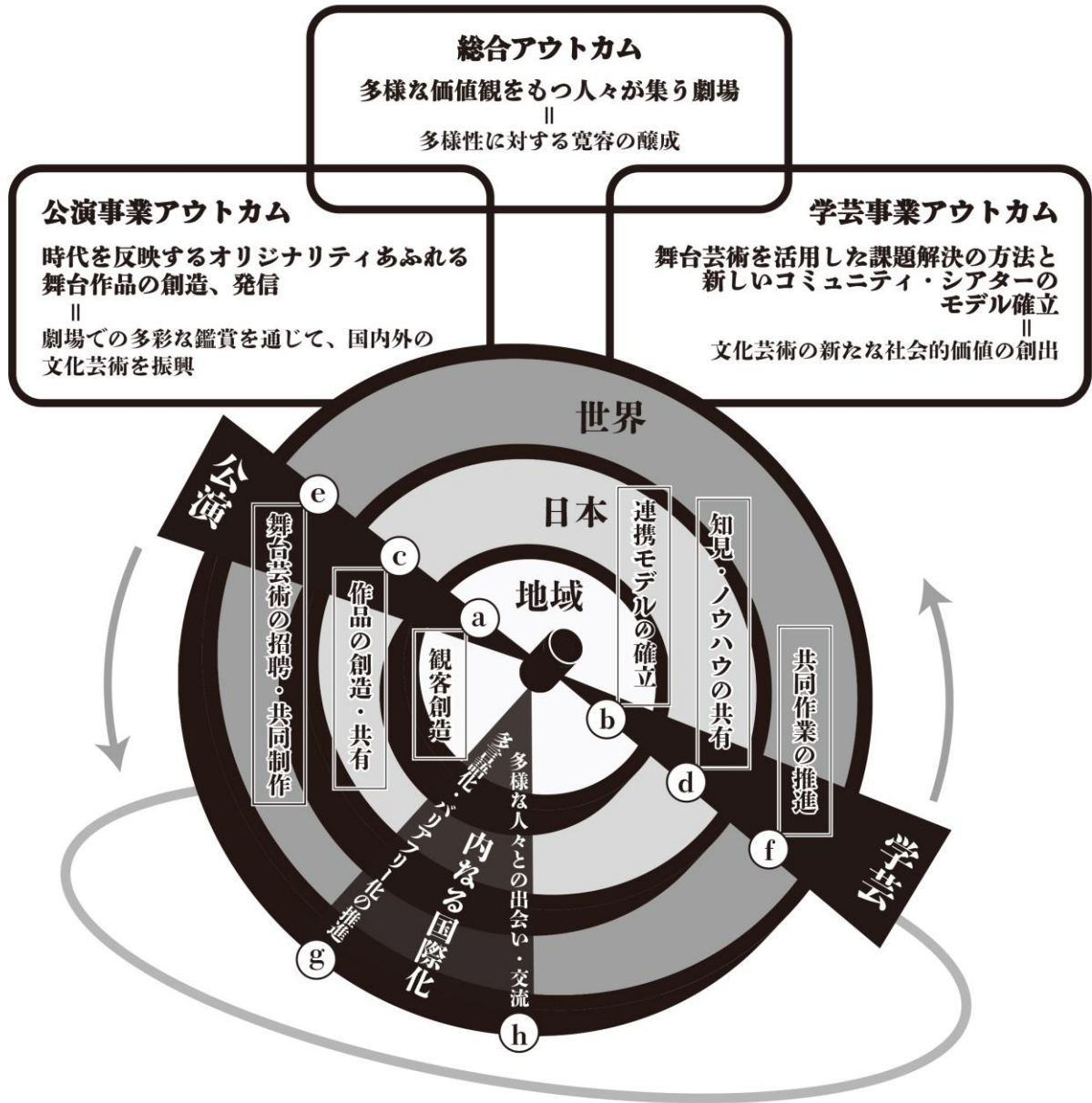
団 体 名	公益財団法人せたがや文化財団
施 設 名	世田谷文化生活情報センター（世田谷パブリックシアター）
助 成 対 象 活 動 名	共に生きる場としての劇場：多様性を巻き込む同心円プロジェクト
助 成 期 間	5 (年間)
内 定 額	63,282 (千円)

1. 事業概要

(1) 事業計画の概要

全体図（概念図）

(事業名) 共に生きる場としての劇場：多様性を巻き込む同心円プロジェクト



(2) 令和4年度実施事業一覧

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	倉持裕演出作品『お勢、断行』	2022年5月11日～ 5月24日	原案：江戸川乱歩 作・演出：倉持裕	目標値	6,468
		世田谷パブリック シアター	出演：倉科カナ、福本莉子、江口のりこ、大空ゆうひ、梶原善 他	実績値	7,556
2	五戸真理枝演出作品『毛皮のヴィーナス』	2022年8月20日～ 9月4日	作：デイヴィッド・アイヴス 演出：五戸真理枝	目標値	2,343
		シアタートラム	出演：溝端淳平、高岡早紀	実績値	3,383
3	せたがやこどもプロジェクト夏の劇場・りんかん学校『流星スプーン』	2022年7月26日、 7月28日、8月1日、 8月3日、8月4日	上演台本・演出：白井晃 出演：公募で集まった子どもたち、 中山祐一朗、古家優里、白井晃	目標値	1,500
		世田谷パブリック シアター		実績値	93※
4	野村萬斎演出作品『ハムレット』	2023年3月6日～ 3月19日	構成・演出：野村萬斎 出演：野村萬斎、若村麻由美、野村裕基、岡本圭人、藤間爽子 他	目標値	5,403
		世田谷パブリック シアター		実績値	7,261
5	せたがやこどもプロジェクト『せたがや 夏いちらくご』	2022年7月30日	プロデュース：春風亭一之輔 出演：春風亭一之輔、三増紋之介、 江戸家小猫	目標値	1,000
		世田谷パブリック シアター		実績値	836※
6	せたがやこどもプロジェクト子どもとおとなのための◎読み聞かせ『お話の森』	2022年7月30日～ 7月31日	出演：ROLLY、片桐仁、馬喰町バンド	目標値	990
		シアタートラム		実績値	874※
7	アートタウン海外招聘公演 カンパニーXY with ラシッド・ウランダン『Möbius/メビウス』	2022年10月21日～ 10月23日	演出・振付・出演：カンパニーXY 振付・コラボレーションアーティスト： ラシッド・ウランダン	目標値	950
		世田谷パブリック シアター		実績値	1,090
8	海外招聘ダンス公演 ピーピング・トム	2023年2月6日～ 2月8日	演出：カブリエラ・カリーソ 出演：ユルディケ・デ・ブール、マ リア・カラリナ・ヴィエイラ、マリ ー・ジーゼルブレヒト 他	目標値	1,050
		世田谷パブリック シアター	現地特別キャストが参加	実績値	1,717

9	フリーステージ	2022年4月29日、 4月30日、5月3日～ 5月5日	出演：世田谷区民を中心とした、音楽教室、ダンス教室、サークル、任意団体など	目標値	2,000
		世田谷パブリックシアター シアタートラム		実績値	1,510※
10	世田谷アートタウン『三茶de 大道芸』	2022年10月15日～ 10月16日	プロデューサー：橋本隆雄	目標値	200,000
		三軒茶屋キャロットタワー、近隣商店街	出演：国内で活動しているパフォーマー27組	実績値	100,500※
11	移動劇場『@ホーム公演』	2020年6月8日～ 6月22日	脚本・演出：ノゾエ征爾	目標値	600
		世田谷区内福祉施設	出演：山本光洋、たにぐちいくこ、ノゾエ征爾	実績値	300※
12	劇場を活用した演劇ワークショップ	2022年4月～ 2023年3月	進行役：すずきこーた、田崎葵、大道朋奈 他	目標値	250
		世田谷パブリックシアター稽古場 他		実績値	248
13	子どものためのワークショップ『せたがやこどもプロジェクト 夏休みワークショップ』	2022年7月～8月	進行役：とみやまあゆみ、青山公美嘉、有吉宣人 他	目標値	150
		世田谷パブリックシアター稽古場		実績値	218
14	学校のためのワークショップ『かなりゴキゲンなワークショップ巡回団』	通年	進行役：青山公美嘉、大道朋奈、すずきこーた、とみやまあゆみ、富永圭一、柏木陽	目標値	3,600
		世田谷区内小中学校		実績値	5,212
15	地域連携プログラム	2022年12月10日	『極楽フェス'22』	目標値	200
		世田谷ボランティアセンター 他	パフォーマンス、上映会、参加型アートなど	実績値	350
16	若手舞台芸術家支援企画 シアタートラム ネクスト・ジェネレーション	2022年12月16日～ 12月18日	上演団体：安住の地	目標値	810
		シアタートラム	脚本・演出：岡本昌也、私道かび 出演：森脇康貴、日下七海、山下裕英、沢柳優大、池浦さだ夢 他	実績値	733

17	Technical Theatre Training Program 2022 舞台技術講座	2022年8月18日 8月19日 8月20日 2023年1月29日	舞台音響入門講座、舞台照明入門講座、舞台技術安全基礎講座、安全セミナー 講師：劇場技術部スタッフ	目標値	250
		世田谷パブリックシアター シアタートラム		実績値	170
18	観客育成プログラム『舞台芸術のクリティック2022-23』	2022年11月6日 11月20日 12月17日 2023年1月15日 2月19日	講師：八角聡仁、高橋宏幸、森山直人	目標値	60
		世田谷パブリックシアター稽古場 他		実績値	100
19	地域の物語	2023年1月～3月	えんげきコース進行役：関根信一、花崎攝 からだコース進行役：山田珠実	目標値	240
		世田谷パブリックシアター稽古場 シアタートラム		実績値	206
20	学芸事業出版	2022年10月～ 2023年3月	活動報告冊子『キャロマグ vol.19』 発行部数：2,000部	目標値	—
		—		実績値	—

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
<p>事業計画に必要な構成要素が有機的に連関し、当初の予定通りに事業が進められているか。</p> <p>「計画工程表」における2年目の計画の達成状況は以下のとおりである。新型コロナの影響は依然として大きかったが、事業中止を避けるための工夫をおこない、コロナ後を見据えた取り組みを開始することで策定したミッションの達成をはかった。</p> <ol style="list-style-type: none">1. 「地域」→「公演」：令和4年度が劇場の開場25周年となる機会をとらえ、記念事業として友の会会員向けの劇場ツアー（2回、91名参加）や区民招待（9公演36ステージ、402人。総合支援対象事業は事業番号2、4、5、7、8、16。以下カッコ内は事業番号）を実施することで、劇場サポーターを増やし、地域住民の「行きつけの劇場」としての立ち位置を確立する努力をおこなった。2. 「地域」→「学芸」：地域連携サポートセンター機能の確立に向け、「地域連携プログラム」（15）において地域の福祉・医療団体と連携して区内下馬地区で高齢者向けフェスティバルを共催し、関係を深化させた。3. 「日本」→「公演」：前芸術監督による古典と現代劇を融合させた作品の創造（4）、コロナのために2020年度に上演中止となった作品の上演（1）、子どもから大人まで楽しめる作品による家族での鑑賞機会の提供（6）、勢いのある落語家による寄席企画の実施（10）など、当劇場ならではの企画をおこなうとともに、ツアー公演（1, 4, 7, 8）を積極的に実施して成果の共有に努めた。4. 「日本」→「学芸」：上記2.の事業を特集した冊子を作成するとともに、劇場ホームページを通じてPDF形式でも無料配布し、事業実施を通じて得られた知見やノウハウを広く共有した。5. 「世界」→「公演」：『毛皮のヴィーナス』（2）で上質な海外戯曲を紹介するとともに、夏の子ども向けプログラムでも『流星スプーン』（3）を取り上げるなど、世界の最先端の劇作家による多様な翻訳戯曲を紹介した。また、水際対策の緩和を受けて海外招聘に注力し、フランスからカンパニーXY（7）、ベルギーからピーピング・トム（8）を招聘した。一時期完全にストップした国際交流を本格的に再開することができた。6. 「世界」→「学芸」：新型コロナの影響により、「地域の物語」（19）において計画していたシンガポールとの共同作業は断念せざるを得なかった。テーマ設定にこれまでの交流を通じて得られた協働者からのインプットを反映させることはできたが、コミュニティにおける感染症への警戒感も継続していることから、今後は別の角度からのアプローチも検討していく。7. 「内なる国際化」→「公演」：英語での情報発信を強化するため、在米の日本演劇研究者に委託して総合支援対象公演の情報を英訳し劇場ホームページで提供した。翻訳のクオリティを担保することが可能となった一方、情報公開までに時間を要する等の問題も生じている。最適な方法を今後も模索していきたいと考えている。8. 「内なる国際化」→「学芸」：在住外国人の参加を見込んだ大道芸フェスティバル（10）は昨年度に引き続き実施形態を大幅に見直さざるを得なくなるなど、コロナ禍の影響が大きかった。
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p> <p>「創造性」の項目で詳述するとおり、公演事業は各種劇評で高い評価を得るとともに、複数の演劇賞を受賞している。また、日本の演劇界では普及しているとは言いがたかったアンダースタディ（スウィング）を置くなど、コロナ禍に立ち向かう先駆的な試みは大きな注目を集め、新聞等で大きく取り上げられた。</p> <p>学芸事業においては、「地域連携プログラム」（15）や「地域の物語」（19）で取り組んだ、地域における独居高齢者の問題や現代における看取りの問題等、少子高齢化が進む日本社会の問題に真正面から取り組んだ事業に注目が集まり、新聞等でも報道された。地域コミュニティからの期待も大きく、社会福祉協議会等、地域の団体との連携が拡大・深化し続けている。</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成し、アウトカムの発現は可能か。

各項目の目標の達成状況は以下のとおりとなった。なお、指標についてはコロナが終息することを前提として設定している。

1-1. 「地域」公演

目標 新規ユーザーの獲得。世田谷区民、若年層の顧客開拓。地域の人々による発表の場の提供。

指標 せたがやアーツカードチケット販売年間 2,500 枚以上、U24 年間 500 人以上入会。世田谷パブリックシアター友の会会員数 3,500 人の水準を維持。地域団体参加型の事業で 100 件以上の申込。地域協働型フェスティバルで 20 万人の来場者。ヒアリング調査による地域の身近な劇場としての評価エビデンスの収集。

実績 せたがやアーツカードチケット販売年間 2,458 枚（未達成 達成率 98.3%）、U24 年間 378 人入会（未達成 達成率 75.6%）、友の会会員数 3,464 人（未達成 達成率 98.3%）、地域団体参加型事業（9）申込 76 件（未達成 達成率 76.0%）、地域協働型フェスティバル（10）で 100,500 万人の来場者（未達成 達成率 50.3%）、評価エビデンスの収集未実施（未達成 実施方法検討中）

1-2. 「地域」学芸

目標 舞台芸術を用いた地域連携モデルの確立。教育、福祉、まちづくりなど様々な領域に、文化芸術の創造性を生かしたプログラムの開発。

指標 ワークショップ・レクチャーの年間実施事業数 40 件、延べ日数 200 日、参加者 4,000 人以上。年 2 件以上の地域課題解決のための事業実施。ヒアリング調査による地域連携事業への評価エビデンスの収集。参加者に占める高齢者の割合 8%以上。特に高齢男性の割合 4%以上。

実績 ワークショップ・レクチャー年間実施事業数 51 件 407 回、延べ日数 207 日、参加者 9,364 人（達成）、地域の課題解決のための事業 4 件（うち補助対象事業 12, 15）（達成）、評価エビデンスの収集未実施（未達成 実施方法検討中）、高齢者の割合 20.1%、高齢男性 5.1%（達成）

2-1. 「日本」公演

目標 高水準の作品の創造及び国内ツアーの実施による成果の共有。

指標 大型主催事業として、年 4~5 作品の上演をおこない、これらの平均入場者率 85%を目指す。また、1~2 作品は国内ツアーを実施する。インターンの受け入れ人数 20 名。メールマガジン年間 12 万人への送信。Twitter のフォロワー数 23,000 人。アンケート調査での年間ラインナップへの積極的な満足層を 40%以上。

実績 大型主催事業 6 件（うち補助対象事業 1, 4, 5, 6, 16）（達成）、補助対象事業の平均入場者率 102.7%（達成）、国内ツアー 3 作品（内 補助対象事業 1, 4）（達成）、インターン 13 人（未達成 達成率 65.0%）、メールマガジン年間 146,467 人送信（達成）、Twitter フォロワー数（5 月 25 日時点）28,792 人（達成）、年間ラインナップアンケート調査未実施（未達成 実施方法検討中）

2-2. 「日本」学芸

目標 プロジェクトによって得られた知見、ノウハウの共有。

指標 知見・ノウハウを年 1 回以上、出版物またはオンラインで共有。新規に教科「日本語」ワークショップを実施する学校を年 1 校以上開拓。

実績 出版物『キャロマガ』（20）年 1 回発行（達成）、学校新規開拓 5 校（達成）

3-1. 「世界」公演

目標 先鋭的な海外舞台芸術の招へい、国際共同制作の推進、多様な価値観を反映した海外戯曲の翻訳上演

指標 海外招聘公演、国際共同制作作品または海外戯曲の翻訳上演作品を年1~2作品上演。平均入場者率60%。

実績 海外招聘公演、海外戯曲の翻訳上演4作品(2,4,7,8)(達成)、平均入場者率134.7%(達成)

3-2. 「世界」学芸

目標 コミュニティ・シアターの分野での国際共同作業の推進

指標 コミュニティ・シアターの分野での海外との共同作業を5年の間に2件以上実施。

実績 海外との共同作業未実施(未達成 コロナ禍の影響が続く中、コミュニティレベルでの交流は極めて難しくなっていることから、異なるアプローチによってアウトカムの発現を目指すことも検討していく。)

4-1. 「内なる国際化」公演

目標 多言語化・バリアフリー化の推進

指標 多言語字幕(聴覚障害者用日本語字幕を含む)付き公演、手話通訳付き公演、舞台説明会付き公演を年4~5回実施する。字幕タブレットを準備するなど、サービス利用者数をあらかじめ設定する公演においては、利用率70%以上を目指す。

実績 手話通訳士待機公演6回(達成)、あらかじめ定員を設定するサービスは行わなかった。

4-2. 「内なる国際化」学芸

目標 性別、年齢、国籍、障害の有無にかかわらず、多様な人々が劇場で出会い、交流する機会を提供。特に在住外国人との連携

指標 在住外国人が参加する普及啓発・人材育成事業を年5回以上実施する。

実績 在住外国人を対象とした事業未実施(未達成 財団内他部署との連携による実施を検討中)

公演事業(「x-1」の番号のもの)については、3-1、4-1について目標を完全に達成するとともに、2-1でほぼ目標を達成することができた。「地域」(1-1)以外は目標をほぼ達成し、「時代を反映するオリジナリティあふれる舞台作品の創造、発信」という「公演事業アウトカム」については相当程度の発現を見たと思われる。

「地域」の部分では指標を満たすことができない項目が多かったが、大きく指標を下回った地域団体参加型事業(9)、地域協働型フェスティバル(10)はコロナの影響で大幅に実施形態を変更したことが主因である。その他の指標はコロナ禍で観客のマインドが冷え込む中で目標値に近い数字となっており、健闘したと考えている。

学芸事業(「x-2」の番号のもの)については、2-2について目標を完全に達成、1-2はほぼ目標を達成することができた。「地域」と「日本」という、学芸事業の「本丸」とも言える身近な場所での活動は十分な成果をあげており、「舞台芸術を活用した課題解決の方法と新しいコミュニティ・シアターのモデル確立」という「学芸事業アウトカム」については、基本的な部分での発現が見られている。

しかしながら、「世界」と「内なる国際化」という、「共に生きる場としての劇場：多様性を巻き込む同心円プロジェクト」で新規性を発揮するべく設定した目標は未達成となっており、この部分にどう取り組むかが大きな課題となっている。コロナの影響で市民レベルでの国際交流が極めて難しくなる中で、一旦途切れた関係性を修復・再生することは単純な作業ではないことも事実であり、財団内の他部門との連携や異なるアプローチによる事業展開も視野に入れ、コロナに対する社会的変化も見据えて事業計画の見直しも検討していく。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んでいるか。

すべての事業において、ほぼ計画通りの期間で事業を実施した。当劇場においては、平成 29 年 12 月に策定した「世田谷パブリックシアター劇場経営に関する基本方針」に基づき、補助金の対象事業となる主催公演のほか、提携公演、貸館公演の事業期間を決定している。それぞれの公演形態の年間比率に基準値を設けてスケジュールを決定することで、プログラムのバランスと一貫性を保つと共に、それぞれの公演形態の相乗効果による多様性を実現している。これにより主催事業の特質を際立たせることが可能となり、効率的なアウトプットの達成につながっている。

入場者数の目標設定も、上記によって導き出された事業期間に基づいて設定している。有料公演事業（1～2, 4～8）の入場者率は平均 118.23%で想定を上回るとともに、昨年度（113.01%）からも着実に改善している。夏場に実施した子どもをメインターゲットとした 2 事業（5, 6）のみ想定を下回ったが、これは事業実施時期にコロナの感染状況が急激に悪化したことが原因である。

もう一つの柱である学芸事業（14～21）でも参加者率は平均で 100.80%となり、ほぼ想定通りに事業を実施することができた。特に、レクチャー、ワークショップ（12～15, 17～19）については 120.37%と大幅に参加者を伸ばすことができた。他方、館全体で実施予定であった「夏の劇場・りんかん学校」(3)、高齢者施設を訪問して上演をおこなう「移動劇場@ホーム公演」(11) や無料で上演する「フリーステージ」(9)、「三茶 de 大道芸」(10) は感染症のリスク軽減の観点から、規模の縮小、回数を減らす、予約制として観客数を調整するなどといった対応をおこなわざるを得なかったことから、いずれも想定を大きく下回る入場者・参加者率となった。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んでいるか。

公演事業に関しては、緊急事態宣言による収容率制限はなくなったものの、関係者の感染による公演中止のリスクと常に隣りあわせでの事業実施を強いられる状態が続いた。また、特に感染拡大の時期には観客のマインドの冷え込みが顕著であり、適切な事業費を設定するための基礎的な要素であるチケット収入の見込みをたてるのがきわめて難しくなったと実感している。そのような状況の中で、公演中止を防ぐことを最優先に工夫を重ねる一方で、リスクを織り込みつつ事業費を設定することを試みた。

具体的には、公演の特質に応じて適切にアンダースタディ（スウィング）を置く措置を継続し、稽古・公演期間中に体調不良者が出た場合でも代役によって事業を継続する可能性を担保した。当劇場が先鞭をつけたこの試みは、新聞等でも大きな注目を集めた。また、公演事業においては定期的に関係者全員の PCR 検査を実施してクラスタの発生を未然に防ぐとともに、体調不良者や濃厚接触の疑いがある者が出た場合にはその都度接触があった関係者全員の検査を実施して感染拡大を防いだ。費用や手間の面で負担は非常に大きいものの、結果として中止となった主催事業が出なかったことは大きな成果であったと考えている。また、特に年度後半は急激な物価上昇の影響を受け、支出が増大する傾向が顕著となったが、補助金を活用して補助対象事業のチケット料金を計画どおり廉価に抑えた。

学芸事業においてもコロナの影響は引き続き大きく、「夏休みワークショップ」(13) は「密」の回避のため 1 回あたりの参加者数を減らし、回数を増やして旺盛な需要に少しでも応えられるようにした。進行役の謝金単価等、1 回あたりの経費は参加者の増減によって大きく変わるわけではなく、事業費は増大している。さらに、すべての事業において進行役の検査費用、手指消毒・参加者が触れる備品や施設の消毒のための消毒液等の消耗品経費が重くのしかかっているが、その他経費を最大限切り詰める努力をおこなった。

(4) 創造性

自己評価

事業計画の内容が、独創性、新規性、先導性等に優れている（と認められる）か。

令和4年4月、20年にわたって当劇場の芸術監督を務めた野村萬齋から白井晃への交代があり、新しい体制での事業運営がスタートした。令和5年度までのプログラム編成の骨格は野村前芸術監督によって作成されたものではあるものの、「共に生きる場としての劇場：多様性を巻き込む同心円プロジェクト」（以下「プロジェクト」）の内容は堅持しつつ、事業目標の実現に向けた白井新芸術監督による新しいアプローチが始まっている。

新芸術監督のイニシアティブによって企画制作した「夏の劇場・りんかん学校」(3)は、白井自らが演出をおこない、夏休みに小学生に劇場での演劇創作の体験の機会を提供した。「同心円」の「地域」のレイヤーで掲げた「劇場の敷居を下げ、地域住民の『行きつけの劇場』としての立ち位置を確立する」という目標への新しいアプローチであり、保護者向けアンケートの回答でも「お芝居にさらに興味がわいたようで、『今度セタパブに白井さんのお芝居見に行こう!!』と話しております」「舞台芸術を観る場所であった、世田谷パブリックシアターが日数を重ねるにつれて子供たちにとって学校の校庭のような身近な場所になっていくのを感じました」といった感想が見られた。

また、国内公演事業についても、白井芸術監督が演出家等と積極的に意見交換をおこない、多彩なインプットをおこなった。特に、『毛皮のヴィーナス』(2)を演出した五戸真理枝のように、当劇場で初めて演出を手掛ける若手演出家にとっては、非常に大きな力になったと思われる。同作では、演出の五戸が第30回読売演劇大賞最優秀演出家賞、美術の長田佳代子が同優秀スタッフ賞を受賞しており、劇場の努力が一つの形になった。劇評でも「二人の俳優の間の劇的緊張が途切れることのない充実した舞台に仕上がっている」（朝日新聞夕刊 2022年8月25日）、「高岡と溝端の名コンビの緩急自在の演技が出色」（読売新聞夕刊 2022年8月30日）と高く評価された。その他の作品も、『お勢、断行』(1)が「スタッフが、俳優の熱演にも負けない充実した仕事をしていた」（読売新聞夕刊 2022年6月7日）、野村前芸術監督演出の『ハムレット』(4)が「萬齋さんが世田谷で取り組んだ、『古典演劇と現代演劇の融合』の集大成」（悲劇喜劇 2023年7月号）、「能を意識した装束や様式美、アナログな見立てなど『演劇知』の集積も意義深い」（毎日新聞夕刊 2023年3月16日）と評されるなど、大きな反響を得た。本年度について特筆すべきは、コロナ禍を経て本格的に再開した海外招聘公演への高い期待と評価である。「身ひとつ灯りひとつが立ち上げるシンプルながら心揺さぶられる情景は、舞台芸術の根源的な力を感じさせるものであった」（オン☆ステージ新聞 2022年12月15日）と評されたフランスのカンパニーXY(7)は、身体性の高さに加え、「気候変動や移民といった社会課題に向けるまなざしに感じられる」（DANCE MAGAZINE 2023年1月号）とその社会性にも注目した劇評が出た。また、ベルギーから招聘したピーピング・トム(8)については、「現代舞踊界で最高水準の舞台であろう」（DANCE MAGAZINE 2023年5月号）との評とともに、「『マザー』における母なるもののイメージは、それこそ世界中の地域、時代や空間の差異も同時に示しているのではないだろうか」（図書新聞 2023年3月25日）とこちらも社会との関わりに注目した評があった。「今、ここで上演する意義があるか」を常に問い続けながら上演プログラムを組み立ててきた当劇場の独創性、新規性が幅広く理解された証左であると受け止めている。

このように、質量共に多様に展開した公演事業は、劇場担当者がきめ細かく作品に関わり、演出家やデザイナー、俳優と深く協働するという、当劇場の創造拠点としての能力が最大限に発揮されることによって特筆すべき成果をあげてきた。演劇雑誌に掲載された2022年を回顧する劇評家の対談で、当劇場の作品について「丁寧に作っていますね」「『毛皮のヴィーナス』も・・・あの水準までもっていくのは、俳優のレベルごと上げたように思う。立派ですね」（テアトロ 2023年2月号）と評されたのは、公共劇場として良質の作品づくりと人材育成に正面から取り組んだ当劇場の姿勢に対する高い評価の表れであると考えている。

自己評価

プロジェクトのもう一つの柱である学芸事業においても、その独創性、先導性が高い評価を得た。例えば、近年、当劇場は、地域の中で孤立し、孤かな状況に置かれている高齢者をアートを媒介としてコミュニティに結びつける活動を続けており、本年度も複数の事業をまたいで展開しているが「劇場を活用した演劇ワークショップ」(12)で「テーマ別ワークショップ」として実施した「だれでも写真クラブ・極楽」は、写真という媒体を用いることで、同種のプログラムへの参加数が少なかった高齢男性にアプローチすることに成功している。そこで作られた作品を「地域連携プログラム」(15)で実施したアートフェスティバル『極楽フェス』において発表した際には、彼らが撮影した写真と日々の思いを綴った日記の朗読を組み合わせることで、高齢者が日々眺めている光景をコミュニティの人々が共に眺め、共有することができた。このような取り組みは新聞の社会面で取り上げられるなど、文化芸術の枠に留まらない注目を集めている。

他方で、本年度は、事業を通じて創造され、コミュニティに共有された成果が、芸術作品として高いクオリティを有していることが改めて評価されたことが特徴的である。『極楽フェス』で展開した、地域に暮らす障害者の思いや暮らしを取り扱った演劇では、観客も作品に参加して自ら体験する手法を積極的に取り入れているが、実際に体験した新聞記者が「参加型演劇では自分も『登場人物』。だからこそ想像力が刺激されるし、全身で体感し、深く内省せずにいられないのだろう。演劇の可能性に触れる、不思議な体験だった」(毎日新聞夕刊 2022年5月31日)と評した。また、「地域の物語」(19)では「看取り」をテーマに、一般の参加者が進行役とともに物語を紡いでいったが、シアターラムでの成果発表は「時間をかけて分かち合った、そのプロセスを見ていたのだという気がします・・・最後に披露された歌に、それでも言葉にならない思いを昇華するような効果があった」(悲劇喜劇 2023年7月号)と評価された。また、「通常『発表会』と聞くと『アマチュアのものだ』という前提で、下駄を履かせながら観てしまいがちだ・・・ところが、実際に観終わった後の私は、そんな下駄をすっかり脱がせてしまっていた・・・じつは誰もが同じぐらいの重みと深みのある繊細な物語を抱えているはずだ。おそらく、私自身も・・・改めて『自分の物語』にも分け入ってみる覚悟を持たなければと思った。そして、それは人それぞれでいい、自分らしくあっていいのだということも教えられた気がする」(Yahoo! Japan ニュース 2023年3月31日)と評したメディアもあった。こうした劇評は、「多様性を巻き込む同心円」を生み出していこうという本プロジェクトが、着実に成果をあげていることを示していると思われる。

事業の実施によって、当該劇場・音楽堂等の国内外での評価の向上につながっている(と認められる)か。

先述のとおり、『毛皮のヴィーナス』の関連で第30回読売演劇大賞で複数の受賞を達成するなど、大きな評価を得た。「全体として世田谷パブリックシアターの作品は一つ一つの作品の水準が高い」(テアトロ 2023年2月号)との評が演劇専門誌に掲載されたことは、個々の作品だけではなく、創造の現場としての当劇場への高い評価が定着してきていることを示している。

また、専門誌が実施した「劇評家が選ぶ2022 ベストステージ」「2022 AICT(国際演劇評論家協会)会員アンケート」(THEATRE ARTS 67号 2023春)では、『毛皮のヴィーナス』(2)が全体上位に選出されたが、その他にもカンパニーXY(7)をはじめとする3本が異なる選者によって選出された。このように、異なるジャンルの多様な作品がそれぞれ高く評価されている点に、劇場全体としてのプログラムの充実度が現れていると思われる。

過去5年間のメディアへの掲載数を見ると、549(H30)→596(R1)→637(R2)→762(R3)→724(R4)となっている。芸術監督退任報道によって令和3年度に掲載数が急増するといった突発的な要素はあるものの、着実に増加しており、当劇場への注目と評価が高まってきていることを示している。令和4年度には、地方紙に学芸事業における高齢者向け事業の取り組みが大きく取り上げられるという新しい展開も見られており、こうした報道をテコとして、学芸事業のノウハウを地方の公共劇場とも共有していく試みを更に拡大していきたいと考えている。

(5) 持続性

自己評価

事業計画を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

世田谷区では、区の「基本計画」の下、分野別計画である「文化・芸術振興計画」（現在は「第3期（調整計画）」）に基づき文化振興が図られている。当劇場においても同計画を大きな指針として持続性・一貫性を担保しつつ活動をおこなっている。また、令和6年度から開始される次期計画の策定にも財団として参画していく予定である。劇場を持続的に管理運営するための指針として、平成29年12月に「世田谷パブリックシアター劇場経営に関する基本方針」、平成30年1月には「公益財団法人せたがや文化財団人材活用計画」を策定した。職員の登用や昇任に関する制度を整備し、財団全体の基幹業務を担う「総合職員」と制作や技術等の専門性の高い業務に従事する「専門職員」（いずれも無期雇用）を配置した。平成30年度からは有期雇用の「契約職員」等の雇用形態から内部登用による専門職員への切り替えを、また平成31年度からは専門職員の主任昇任を実施している。令和4年度においては、新たに契約職員から専門職員に1名登用、専門職員の1名が主任に昇任した。

他の公共劇場や関連団体との連携強化にも力を注いでいる。当劇場で企画制作した作品のツアー公演を全国各地の公共劇場において実施し、成果の共有を図っている。その際にはネットワーク強化事業補助金も活用している。また、劇場、音楽堂等連絡協議会事務局に当劇場職員が参加し、公共劇場間の情報共有や連携促進に積極的に取り組んでいる。さらに、コロナ禍を契機として設立された緊急事態舞台芸術ネットワークの事務局に当劇場スタッフが参画し、公共劇場だけでなく民間劇場とも連携しアフターコロナに向けて取り組んでいる。

さらに、海外招聘公演の本格的な再開に向けて在京の各国大使館や文化機関、海外のカンパニーとの連携を再活性化させており、将来に渡って国際交流事業を持続的に実施するための基盤を整えている。

持続的なアウトカムの発現・定着が期待できるか。

令和4年4月より白井晃が芸術監督に就任し、新芸術監督のもと新しいアプローチで事業を進めていく一方で、「共に生きる場としての劇場：多様性を巻き込む同心円プロジェクト」における持続的なアウトカムの発現に向けた取り組みを続けている。芸術監督の選任にあたっては、まず劇場スタッフに対するヒアリングを実施して芸術監督に望むことをまとめ、その後、その実現を期待できると思われる候補者のロングリストの作成、劇場スタッフによる検討結果を反映させたショートリストの作成、財団理事を構成員とする経営委員会による候補者の交渉順位の決定、財団事務局による交渉・内定、区長による任命というステップを踏むことで、劇場のミッション・ビジョンを共有し、芸術監督交代による方針の断絶や急変を避け、持続性を担保している。

劇場としては、世田谷区の外郭団体行動計画に従いPDCAサイクルを機能させるべく、事業の計画時及び実施後に文化生活情報センター幹部会において検討・評価を行う体制を確立している。さらに、「人材活用計画」を基に、職員を適切に処遇することでモチベーションの向上と人材育成を図っており、持続的に事業を展開することでアウトカムの発現・定着に向けた組織体制の強化に取り組んでいる。

また、事業実施体制の持続性を確保するため、「世田谷パブリックシアター友の会」「せたがやアーツカード会員」「U24」といった会員組織および会員制度を劇場運営の基盤とするとともに、時代に合わせたサービスの見直し・導入を検討することで、観客の裾野を広げ、観客の新規開拓を図っている。

令和4年度には、新たな劇場ファン獲得のための新しい方策として芸術監督のナビゲートによる劇場ツアーを定期的実施した。開場25周年記念事業として実施したもので、本年度限りの予定であったが、大好評を得たことから、次年度以降も引き続き実施していく予定である。劇場が実施する事業に加え、劇場そのものの魅力も合わせてアピールすることで、公演やワークショップの来場者・参加者の増加に繋げることが可能になると考えている。「世田谷パブリックシアターを開かれた劇場にする」という白井芸術監督の明確なポリシーのもと、劇場を訪れるきっかけを提供することで、アウトカムを持続的に発現・定着させるための礎を築くことが期待できる。